

かみ やま の まる
上 山 の 丸 遺 跡
きた の さこ
北 の 迫 遺 跡
こ 小 まる
小 丸 遺 跡

県道宮崎～北郷線地方道特別改良 1種工事に伴う発掘調査報告書

1993・3

宮崎県教育委員会

「上山ノ丸遺跡・北ノ迫遺跡・小丸遺跡」正誤表

頁	行	正	誤
3	9	道路状	道路条
4	4	60分の1	20分の1
4	第4図	1 ■	5 ■

序

県道宮崎北郷線は宮崎市から清武町を経て北郷町につながる主要道路であります。この宮崎北郷線に一部平行する国道220号線は周辺の市街化と共に混雜し、宮崎北郷線がそのバイパス的な役割を果たすようになりました。そのため県土木部では道路の改良を行うことになり、本書で報告する上山ノ丸遺跡、北ノ追遺跡、小丸遺跡の調査はその事業に伴うものであります。

宮崎県教育委員会では事前に土木部と協議を持ち遺跡の現状での保護に努めていますが、やむを得ず破壊される場合には発掘調査を実施し、記録保存を行っております。本書で報告する上山ノ丸遺跡・北ノ追遺跡・小丸遺跡は平成元年から3年間にかけて宮崎県教育委員会において発掘調査を行ったものです。縄文時代早期から近世の遺構や遺物が出土しております。

この報告書が広く活用されることを念願し、調査にご協力頂いた地元の方々及び清武町教育委員会の方々に深く感謝するものであります。

平成5年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高 山 義 孝

例　　言

1. 本書は、県道宮崎・北郷線地方道特別改良1種工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎県教育委員会が主体となり、上山ノ丸遺跡が平成元年5月8日～5月30日までの間、北ノ追遺跡が平成2年10月15日～11月16日までの間、小丸遺跡が平成3年7月1日～7月15日までの間行った。
3. 本書に使用した方位は位置図については真北であるが、外は全て磁北である。レベルは海拔絶対高である。
4. 本書の執筆は第I章北郷泰道、第II章長友郁子、第III章長津宗重、第IV章、第V章長友郁子が行い、編集は長友郁子があつた。
5. 第II章第2節4) 板碑については元宮崎県総合博物館伊豆道明氏、宮崎県文化課主査前田博仁氏の御教示を受けた。
6. 遺物は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

調査の組織

調査主体 宮崎県教育委員会

教　育　長	児　玉　郁　夫	(平成元年度～2年度)
	高　山　義　孝	(平成3年度)
文　化　課　長	久　徳　菊　雄	(平成元年度)
	梨　岡　　孝	(平成2年度)
	長　友　　巖	(平成3年度)
課　長　補　佐	片野坂　次　彦	(平成元年度～2年度)
	串　間　安　圓	(平成3年度)
埋　藏　文　化　財　係　長	岩　永　哲　夫	
庶　務　係　長	小　倉　茂　光	(平成元年度～2年度)
	税　田　輝　彦	(平成3年度)
調　査　担　当	岩　永　哲　夫	(上山ノ丸遺跡)
	長　友　郁　子	(上山ノ丸・小丸遺跡)
	長　津　宗　重	(北ノ追遺跡)

調査協力 清武町教育委員会

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 上山ノ丸遺跡の調査	
第1節 調査の概要	3
第2節 調査の成果	
(1) 土層の状況	4
(2) 縄文時代の遺構と遺物	4
(3) 道路状遺構について	5
(4) 板碑について	6
(5) 小結	8
第Ⅲ章 北ノ追遺跡	
第1節 遺跡の概要	9
第2節 包含層の状態	9
第3節 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 遺構	9
(2) 縄文土器	13
第4節 小結	14
第Ⅳ章 小丸遺跡の調査	
第1節 調査の概要	20
第Ⅴ章 おわりに	20

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 周辺地形図	2
第3図 遺構配置図	3
第4図 基本土層図	4
第5図 遺物実測図	4
第6図 集石遺構実測図	5
第7図 道路状遺構(1)	6
第8図 道路状遺構(2)	6
第9図 板碑出土状況	7
第10図 板碑拓影	7
第11図 周辺地形図	10
第12図 土層断面図	11
第13図 遺構分布図	12
第14図 1号土壤・1号集石遺構実測図	13
第15図 縄文土器実測図(I)	15
第16図 縄文土器実測図(II)	16

第17図 繩文土器実測図(Ⅲ)	17
第18図 繩文土器実測図(Ⅳ)	18
第19図 繩文土器実測図(Ⅴ)	19

図 版 目 次

小丸遺跡散石検出状況	20
図版 1	21
A地区 全景	
B地区 全景	
A地区検出 集石遺構	
A地区検出 集石遺構掘込	
A地区検出 道路状遺構	
B地区検出 道路状遺構地山掘削状況	
A地区 板碑精査状況	
上山ノ丸遺跡基本層序(A地区中央壁)	
図版 2	22
北ノ追遺跡 A地区全景(南西から)	
北ノ追遺跡 B地区全景(西から)	
北ノ追遺跡 D地区全景(北から)	
北ノ追遺跡 C地区全景(南から)	
図版 3	23
北ノ追遺跡 C地区1号土壤	
北ノ追遺跡 C地区1号土壤	
北ノ追遺跡 D地区1号集石遺構	
北ノ追遺跡 D地区1号集石遺構	
図版 4	24
北ノ追遺跡出土繩文土器I・II類	
北ノ追遺跡出土繩文土器II類	
北ノ追遺跡出土繩文土器II類	
北ノ追遺跡出土繩文土器II類	
図版 5	25
北ノ追遺跡出土繩文土器II類	
北ノ追遺跡出土繩文土器V・VI類	
北ノ追遺跡出土繩文土器V類	
北ノ追遺跡出土繩文土器II類・底部	
図版 6	26
北ノ追遺跡出土繩文土器V・VI・VII類	
北ノ追遺跡出土打製石器	
北ノ追遺跡出土磨石	
北ノ追遺跡出土石皿	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

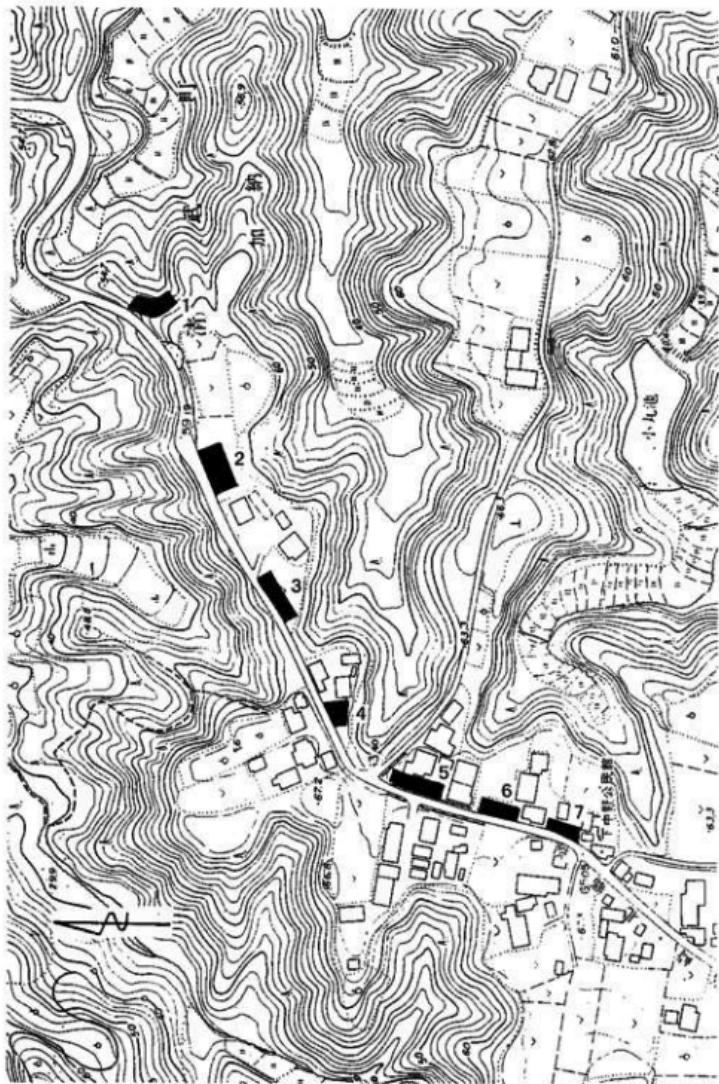
平成元年4月10日付けで宮崎土木事務所長から、主要地方道宮崎北郷線のうち、清武町大字宇野の拡幅工事区域について、「文化財の所在の有無について」の照会がなされた。文化課で分布調査の結果、家屋立ち退きの完了した平成2年度工事予定地内で、縄文時代早期の土器片と焼石の存在を確認した。その段階で表掲はできなかったものの、立地的に平成元年度工事予定地においても埋蔵文化財の存在が考えられたため、4月17日から20日の間、試掘調査を実施した。その結果、平成2年度工事予定地内で確認されたのと同様の縄文時代早期の文化層の残存が確認されると共に、台地端部に旧鉄肥街道の遺跡と台地上で倒壊した板碑が確認された。

これらのことから、文化財の取扱いについて協議を行った結果、工事に先立ち三か年に分けて発掘調査を実施することになり、平成元年5月8日から5月30日にかけて岩永哲夫と長友郁子の担当で1次調査、平成2年10月15日から11月16日にかけて長津宗重の担当で2次調査、平成3年7月1日から7月15日にかけて長友郁子の担当で3次調査を実施した。



- 1.上山ノ丸遺跡
- 2.北ノ迫遺跡
- 3.小丸遺跡
- 4.傘松遺跡
- 5.古障遺跡
- 6.稻津掃部助墓
- 7.伊東祐堯公墓
- 8.清武城跡
- 9.中ノ尾第1遺跡
- 10.安井息軒旧宅
- 11.中ノ尾第2遺跡
- 12.槍ノ内第1遺跡
- 13.伊東家偽墓
- 14.槍ノ内第2遺跡
- 15.辻遺跡
- 16.中原遺跡
- 17.菖蒲追遺跡
- 18.須田木遺跡
- 19.若宮田遺跡
- 20.長嶺遺跡
- 21.ぎょにもん屋敷跡
- 22.清武町第3号墳
- 23.清武町第2号墳
- 24.清武町第1号墳
- 25.清武町古墳
- 26.清武町第4号墳
- 27.清武町第5号墳

第1図 遺跡位置図



- 1.上山ノ丸遺跡B地区 2.上山ノ丸遺跡A地区 3.北ノ追遺跡A地区
 4.北ノ追遺跡B地区 5.北ノ追遺跡C地区 6.北ノ追遺跡D地区 7.小丸遺跡

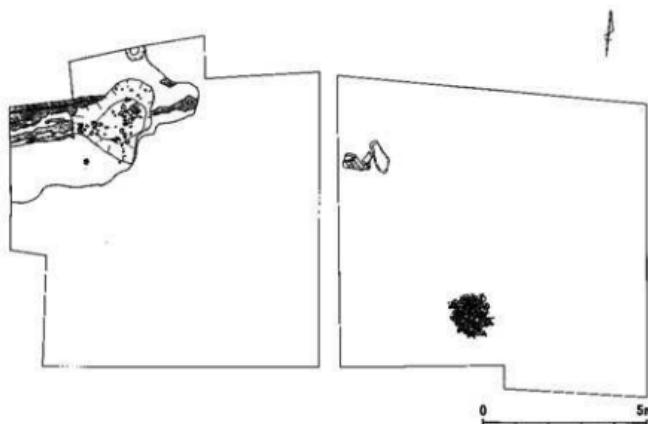
第2図 周辺地形図 (1/1,000)

第Ⅱ章 上山ノ丸遺跡の調査

第1節 調査の概要

上山ノ丸遺跡は宮崎県宮崎郡清武町大字加納字上山ノ丸丙1302-1外に所在する。標高は約60mを測る。遺跡は台地の縁辺部に位置し遺跡から東を望むと遠くに日向灘が見られる。A地区は台地を登りきったところに位置し、B地区は谷が台地上に登りきる手前の小規模な平場に所在する。標高差は約6mである。A地区・B地区共に調査区内の傾斜はほとんどなくほぼ平坦である。調査区の調査前の状況はA地区は畠地、B地区は山林であった。

上山ノ丸遺跡では道路改良の行われる部分に10mグリッドを設定して調査を行った。A地区から縄文時代早期の集石遺構1基と板碑3基、時期不明の道路条遺構1本が、B地区からは鉢肥街道の一部と考えられる遺構が検出された。それらに伴う遺物はほとんど出土していない。土層の堆積状況は悪く、縄文時代早期の包含層が耕作土のすぐ下にあり、かなり削平を受けていた。A地区に検出された板碑は調査区の旧土地所有者が現在までに祭祀を行っていたものであるので、現地での調査終了後、旧土地所有者の所有地に移転された。



第3図 遺構配置図

第2章 調査の成果

(1) 土層の状況

第4図は上山ノ丸遺跡における基本土層図である。縮尺は20分の1である。上山ノ丸遺跡における土層の堆積状況はA地区とB地区では極端に異なる。第4図はA地区からサンプリングした基本層序である。I層：耕作土、I'層：明るい褐色土（I層とIII層の混じり）、II層：褐色土、III層：褐色土（II層より暗く灰色かった黒褐色土のブロックが混入）、IV層：褐色土（III層より暗く粘性が強い）、V層：灰褐色土（粘性が強く礫混入）となる。縄文時代早期の遺物包含層はIII層：褐色土である。B地区では谷部から台地上に上がる途中の平場ということもあり土層の堆積状況は基盤となる宮崎層群の上に10~20cm程度の腐食土が被るだけである。A地区における宮崎層群の位置はV層：灰褐色土の下位と考えられる。

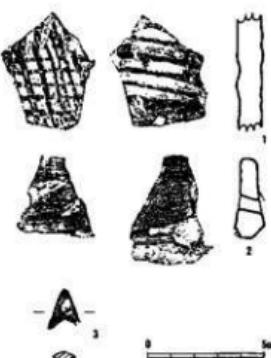
(2) 縄文時代の遺構と遺物

第6図の集石実測図はA地区の耕作土直下のIII層から検出されたものである。直径1mを越す大型のものである。中に使用されている石は長軸が15~20cmの比較的破碎が進んでいない石を使用している。中に磨り石片を6点含むが、土器片は含まれなかった。III層に掘込み掘込みを持ち、中心に炭化物のような黒色土が入っていた。集石の石も掘込みの埋土もあまり焼けていない。堀込みはほぼ円形を呈し、なだらかな傾斜を持つ。配石は持たない。縄文時代の遺構はこの集石遺構以外には検出されなかった。それは集石遺構が耕作土の直下から検出されたことからも分かるように、縄文時代早期の文化層がすでに耕作等により削平されていたことによるところが大きいと考えられる。

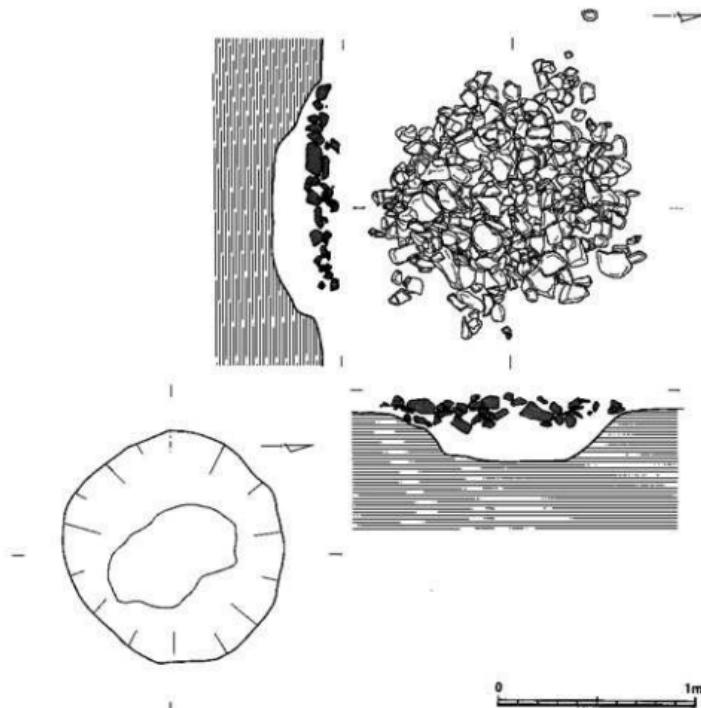
第5図の遺物は、A地区から出土したものである。1は須恵器の脚部片である。器形は不明である。3は、安山岩製の石鏡である。小型で脚部の片方が欠損している。調整は全体的に粗いが形は整っている。3点とも耕作土中からの出土である。

I	1層：暗褐色土 (耕作土)
I'	I'層：明るい暗褐色土 (I層とIII層の混じり)
II	II層：褐色土層
III	III層：褐色土層 (II層より暗く、灰褐色のブロックを含む)
IV	IV層：褐色土層 (III層より暗く、粘性が強い)
V	V層：灰褐色土層 (粘性が強く、円礫を含む)

第4図 基本土層図



第5図 遺物実測図



第6図 集石造構実測図

(3) 道路状造構について

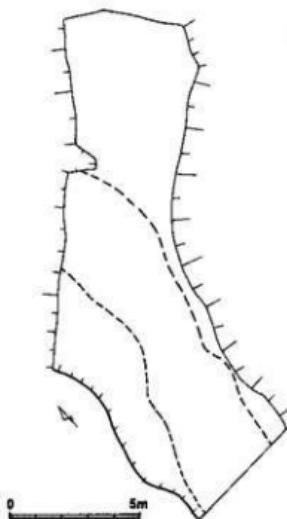
上山ノ丸遺跡A地区では硬化面を持つ道路造構が、B地区からは基盤となる宮崎層群を削平している、旧祇肥街道と見られる造構が検出された。

A地区の道路状造構は最大幅1.2m、長さ5.75mを測り、東西方向に延びているが、中心部分を擾乱により切られている。硬化面は全体的に一様に広がるのではなく西側部分では幅約10cm程度の細かな溝のようなもので切られている。東側部分では硬化面が幅5~40cm、長さ1m45cmに渡って検出された。硬化面を切っている溝のようなものの深さは5cm程度と浅くどの様な用途なのかまた、単なる水の作用によるものなののかは不明である。この造構が造られたまたは使われた時期に関しては遺物の出土が無いため不明であるが、旧祇肥街道との関連を考える可能性は残されている。造構の外から動物の歯が見つかっているが、造構に伴うものではなく、昭和になってから家畜として飼われて死んだ牛か馬のものと考えられる。

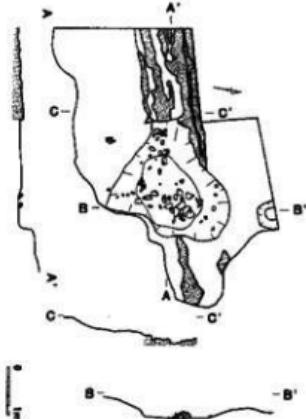
B地区の道路状遺構は旧飫肥街道と考えられる。A地区とB地区の間には約6mの標高差があり、台地の縁辺部にあたるため岩盤が露出している。そのため岩盤が露出している所を迂回して台地に上がる道が造られたものと考えられる。遺構としては、B地区の岩盤の露出している部分約5mをわずかに削っているのが確認されたが、道そのものはっきりとした範囲は確認できなかった。第7図の破線部分は発掘調査時の所見から道状遺構の下場のラインである可能性が考えられる。出土遺物は無い。岩盤の削出はおおがかりなものではなく高さは10cm程度しか削った跡が見られない。

(4) 板碑について

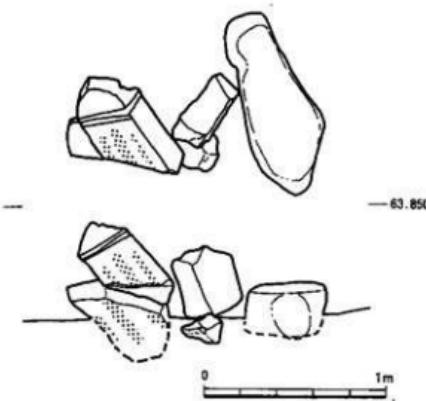
A地区の中央に調査時まで祭られていたものである。調査前には板碑の脇に柳が植えられていた。その柳を切り払い精査した結果、自然石のもの1基、切り石のもの2基の合計3基がバラバラの状態で遺存していた。それぞれの板碑は原位置をとどめておらず、自然石のものを除いて切り石のものは崩壊していた。3基のうち切り石のものの1基は3個以上に割れており中央部が失われている。その板碑は頭部が三角形を呈し2本の線刻が有り、その下にわずかに段を作っている。正面に文字が線刻しており、下部の線刻部分には墨が残存していたので作られた当初は線刻部分に墨が入れられていたものと考えられる。自然石のものは完形で遺存しており、全長1mを越える大型のものである。表面には線刻や墨書き等は見られなかった。切石のものの主文の内容は「奉憶念大乘妙口部為當得菩提也」となり、墓ではなく物故者に対する供養塔であったと考えられる。主文の両脇に書かれている文は偈文といい、仏の徳をほめたたえる韻文体の詩である。出典は大乗妙経（法華経）からと思われるが、詳細は不明である。



第7図 道路状遺構(1)



第8図 道路状遺構(2)



第9図 板碑出土状況

上山ノ丸遺跡近くの板碑を見ると、主文の「憶念」の部分が「読誦」もしくは「讃詠」のものかほとんどで「憶念」となるものは例が見あたらない。「憶念」の意味は「覚えていて忘れないこと」であるから、この板碑の主文の意味は「当得（故人の名）の菩提を弔う為に大乗妙経を（全）部覚えて、今後も忘れない。」という意味であると考えられる。したがって、主文の欠損部分には「典全」もしくは「典一」の文字が入ると考えられる。通常供養塔の場合、死者の年期供養の時に建てられるので主文の脇にその旨が刻まれているが、この板碑についてはそれも記されていないので不明である。

この板碑は清武町黒北で取れる凝灰岩を使用して作られており、頭部の2本の線刻が矢研状を呈し、額の出かたが頭著ではないことから、室町時代の終りから江戸時代の始めの時期に造られたものと考えられる。

上山ノ丸遺跡の板碑の調査前の状況は、辛うじて祭祀は行われていたものの廐仏棄釈で壊されていた。調査時の状況を実測図にとった後、板碑をどこで掘込みの確認を行ったか板碑建立当時の掘込みや砂利などは見られなかった。したがって、上山ノ丸遺跡の板碑3基は原位置



第10図 板碑拓影

を保っておらず近辺から移転してきたものと考えられる。この板碑が建てられていた場所としては寺の墓地も考えられるが、現在は近くには所在しない。また、平部城南の「日向地誌」にもそれに相当すると考えられる寺の記述は見あたらないので、廃仏棄釈以前に廃絶された寺が近辺に所在した可能性も考えられる。

(5) 小結

上山ノ丸遺跡は縄文早期と近世を中心とする遺跡である。縄文時代早期について考えるとA地区の調査面積200m²に集石遺構1基のみというのは遺構密度としては低いと言えよう。また、集石遺構に伴う土器片の出土が無いことから縄文時代の遺跡としてはあまり良好な状態であったとは言い難い。これは集石遺構が表土層直下から検出されたことによる部分も大きいと考えられる。近世の遺跡としては県内でも発掘例の少ない街道遺構を調査できたことが大きな成果と言えよう。しかしながら、その調査面積は少なく遺構としても良好な状態で検出できたとは言い難いと考えられる。それが遺存状態の悪さからくるものなのか。それとももともと祇肥街道のその部分がその様なものなのかは調査事例のきわめて少ない現段階においては不明である。今後の調査事例の増加を待ちたい。

いずれにしても上山ノ丸遺跡においては祇肥街道が占める位置がきわめて大きい。A地区に遺存する板碑も元々は祇肥街道脇の寺の墓地か屋敷墓に祭られていた可能性が考えられる。今後近世の遺跡を考える上で道についてより深く考える必要があるであろう。

末筆ながら本報告書の板碑に関する報告を記すにあたって、元宮崎県総合博物館、伊豆道明氏に御教示をいただいた。記して謝したい。

参考文献

- (1) 芹付和樹 「第3節 板碑の總括」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集 山内石塔群』 宮崎県教育委員会 1984
- (2) 洪谷忠章 「3 大分県・宮崎県」『板碑の総合研究2 地域編』 柏書房 1983
- (3) 久枝 敏・川崎満也 「祇肥街道」『宮崎県歴史の道調査報告書』 宮崎県教育委員会 1978
- (4) 清武町教育委員会 「清武町遺跡詳細分布調査報告書」『清武町埋蔵文化財調査報告書 第4集』 清武町教育委員会 1990

第III章 北ノ追遺跡

第1節 遺跡の概要

北ノ追遺跡（清武町大字加納字中原北ノ追丙1181外）は、清武川に向かって南へ伸びる日南山塊の丘陵上（標高53.4m）に位置する（第1図）。

県道改良工事に伴って平成2年10月15日～11月16日まで310m²の調査が県教育委員会によって行われた。A～D区の4地点を調査した結果、アカホヤ層が残存していなかったA区（調査面積70m²）・B区（60m²）からは遺構は検出されなかったが、アカホヤ層が残存していたC区（70m²）から土壌1基、D区（110m²）で集石遺構1基が検出された。アカホヤ下層から塞ノ神式土器・条痕文土器などの早期の土器群が出土したが、塞ノ神式土器が主体である。石器としては石皿・磨石・凹石・打製石器が出土している。全体的に遺物量は少ない。

第2節 包含層の状態（第12図）

A～D区のうちA・B区はアカホヤ層が残存していなかったが、C・D区は残存していた。

A区はI層が褐色土層（7.5YR 4/6・耕土）、II層が明褐色土層（7.5YR 5/8・灰褐色土層ブロック混じり）、III層が浅黄橙色土層（7.5YR 8/6・粘質）、IV層が橙色土層（7.5YR 6/6）である。

B区は客土が行われており、I層が暗褐色土層（7.5YR 3/3・客土）、II層が明褐灰色土層（7.5YR 7/1・シラス客土）、III層が灰褐色土層（7.5YR 4/2・表土）、IV層が褐色土層（7.5YR 4/4・V層混じり）、V層が明褐色土層（7.5YR 5/6）、VI層が明黄褐色土層（10YR 6/6・粘質で固い）である。

C区は二次堆積のアカホヤ層があり、I層が暗褐色土層（7.5YR 3/3・表土）、II層が橙色土層（7.5YR 6/8・アカホヤ層）、III層が明褐色土層（7.5YR 5/6）、IV層が明褐色土層（7.5YR 5/8・灰褐色土層ブロック混じり）である。遺物はIII層から出土している。

D区はI層が灰褐色土層（7.5YR 4/2・表土）、II層が褐色土層（7.5YR 4/4・耕土）、III層が黄橙色土層（7.5YR 7/8・アカホヤ層）、IV層が黒褐色土層（7.5YR 3/1）、V層が褐色土層（7.5YR 4/3・褐色土層ブロック混じり）、VI層が暗褐色土層（7.5YR 3/3・固い）である。遺物はIV層から出土している。

第3節 繩文時代の遺構と遺物

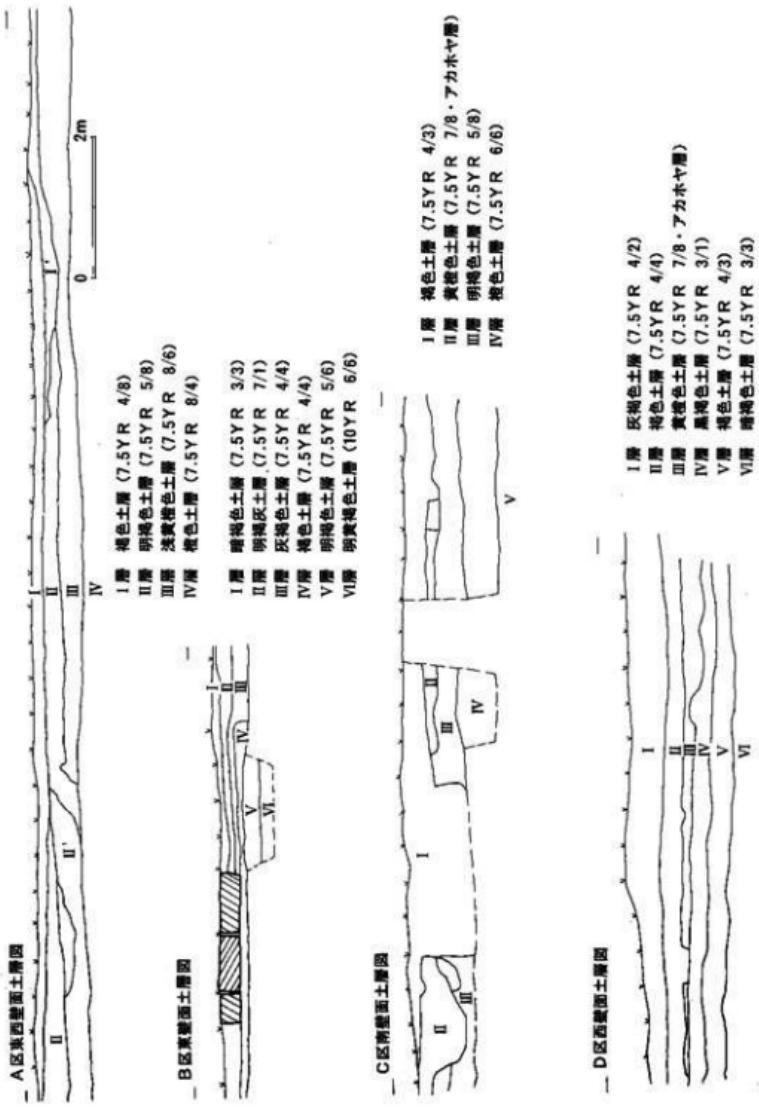
早期の遺構としてはD区で集石遺構が1基検出され、条痕文土器・塞ノ神式土器などの早期の土器群と磨製石斧・石皿・磨石などの石器が出土した（第13図）。

(1) 遺構

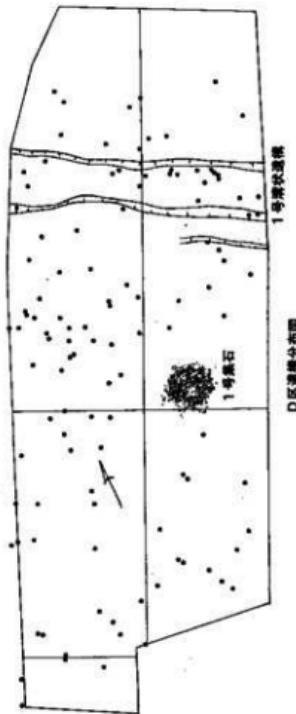
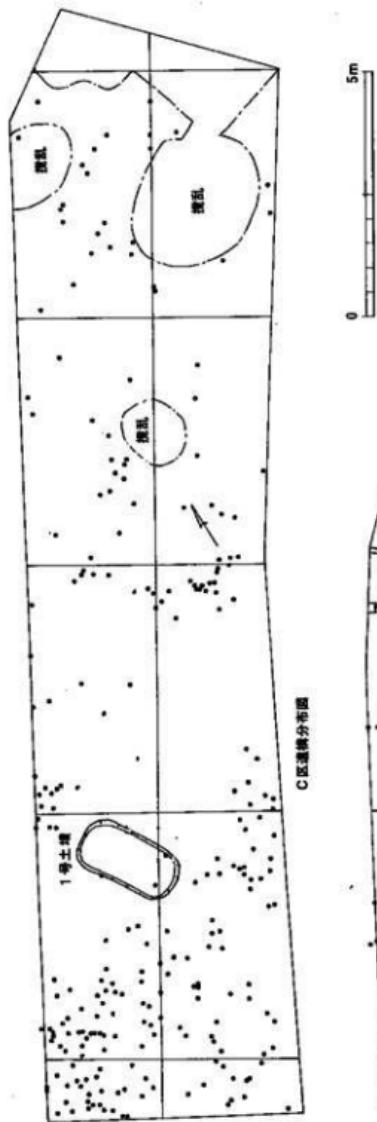
1号集石遺構（第14図）

第11圖 周辺地形圖





第12図 土層断面図



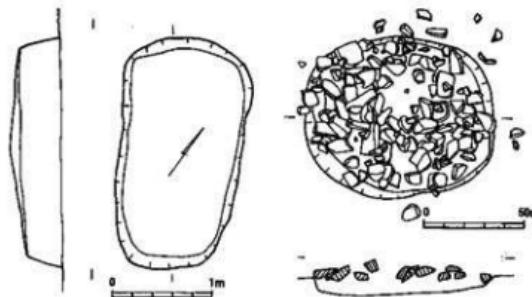
第13图 遗物分布图

●陶文土器

D区で検出された1号集石遺構は、長径93cm、短径80cm、深さ10cmの橢円形プランの土壇に、長径98cm、短径85cmの範囲に100個余りの焼石が集中している。

1号土壇（第14図）

C区で検出された1号土壇は北北西—南南東に主軸を長さ228cm、幅120cm、深さ51cmの橢円形プランの土壇である。埋土のI層は黄橙色土層（7.5YR 7/8）、II層は黒褐色土層（7.5YR 3/2）、III層は明褐色土層（7.5YR 5/6）、IV層が褐色土層（7.5YR 4/4）である。I層はアカホヤ層を主体としている。土壇内から縄文土器片5点と黒曜石片が1点出土した。塞ノ神式土器の口縁部の103・104であり、103は外面に2条の沈線を施し、両者とも口唇部に刻み目を施している。



第14図 1号土壇・1号集石遺構実測図

(2) 縄文土器（第15～19図）

縄文土器はA・C・D区で出土しているが、A区からは少量で、C・D区から集中して出土している（第13図）。

当遺跡から出土した縄文土器は完形に復元できるものではなく、小破片が多いので、深鉢形土器の口縁部形態や文様、その他の特徴をもとに説明し、次に底部の順に説明する。A区出土が1・2、C区出土が3～104、D区出土が105～130である。

I類（第15図1・2）

I類は縄文を地文として上に平行に4条の断面三角形の突帯を巡らしている。

1・2とも胴部の破片である。

II類（第15図3～18、第16図19～49、第17図50～77、第19図114～121）

II類は塞ノ神式土器である。「く」字に外反する口縁部に3・4のように無文のものと5・6・103・105・107のように2条の平行沈線を巡らすものがある。一方、胴部の上半部は3の

ように平行沈線間に連続刺突文を施すものと4~6のように平行沈線文のものがある。縦方向の撚糸文の破片である(36~56・114~121)。縦方向の撚糸文の上から多条の平行沈線を施している(36~73)。74・76は平底の底部で、74は底部付近を撚糸文の上から1条の沈線を施している。

III類(第17図78~80)

貝殻腹縁による条痕文を短くジグザグに施している胴部片である。

IV類(第18図84~90)

浅い凹線を幾何学的に施している胴部片である。

V類(第18図98~102、第19図126・127)

微隆起線文に細かい刻み目を施している。

VI類(第19図124)

横方向の貝殻条痕を施す胴部片である。

VII類(第19図130)

外反する波状口縁部にはヘラ沈線による縦方向の連続刺突文を施し、口唇部にも連続刺突文を施している。口唇部は平坦に仕上げている。

底部(第17図75・77、第19図122・123)

口縁部から底部まで残存する完形の土器が全然出土していないので、74・76以外はI類~VII類の土器のどの底部に対応するのか不明である。

底部の形態には75のように上げ底があるが、残りの75・77・122・123は底部の中央部のみであるので立ち上がりの形態は不明である。

(3) 石器(図版6)

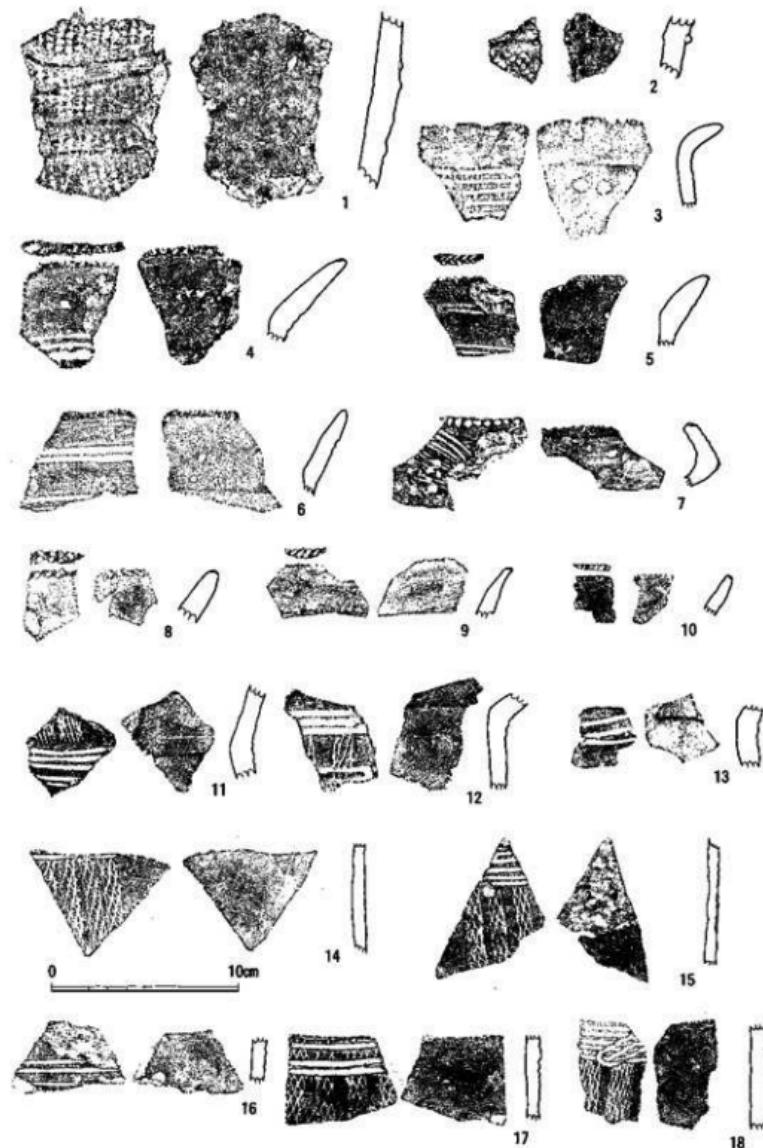
C区からは打製石鏃9点・石皿4点・磨石4点・凹石1点、D区からは打製石鏃1点・磨石2点・凹石1点が出土している。

第4節 小結

当遺跡で出土した縄文早期の土器群は塞ノ神式土器を主体としており、その時期は集石構1基と土墳1基のみであった。なお塞ノ神式土器を主体とする近隣の遺跡としては宮崎学園都市遺跡群の堂地西遺跡A区や下田畠遺跡があるが、調査面積が少ないために比較するには至らない。

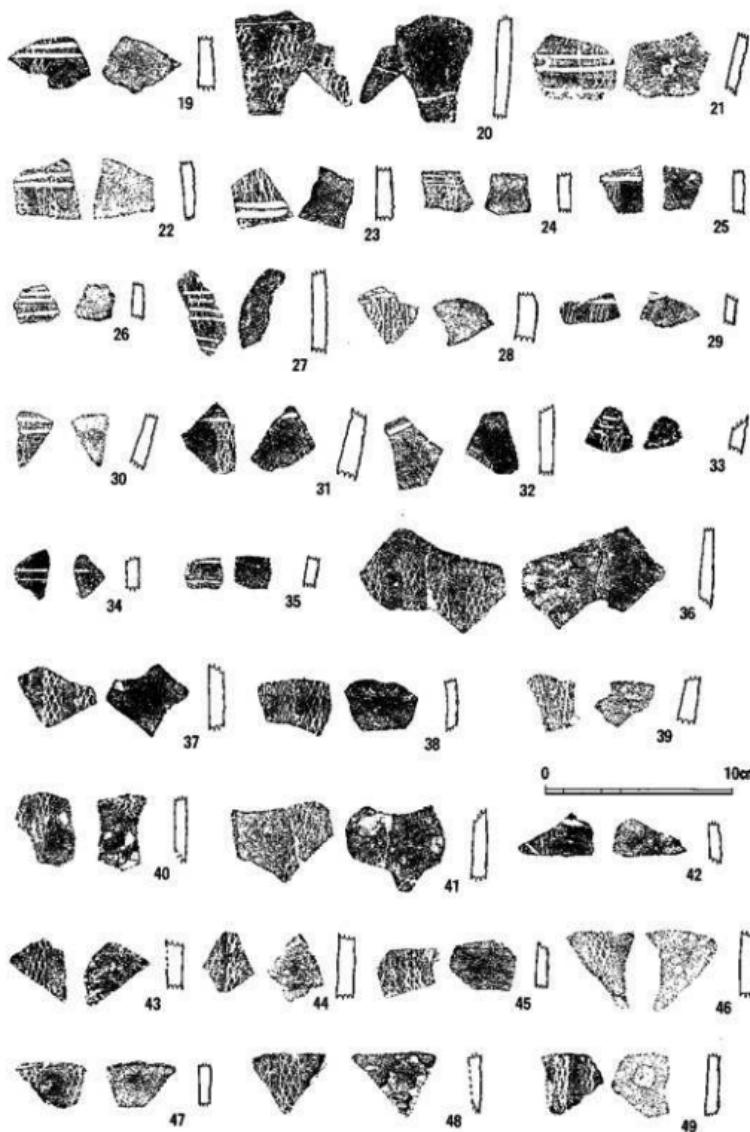
当遺跡の石器組成は打製石鏃10点などの狩猟用具が45.5%、石皿4点・磨石6点・凹石2点などの植物調理用石器が54.5%とほぼ半々であるが、磨製石斧・石錐などを欠如している。

今回の調査は調査面積が非常に狭かったために縄文早期の様相のほんの一部をかいま見るのに止まった。



第15図 繩文土器実測図(1)

1・2 A区
3~18 C区



第16図 繩文土器測図(II)

19~49 C区



第17図 縄文土器実測図（III）

50~81 C区



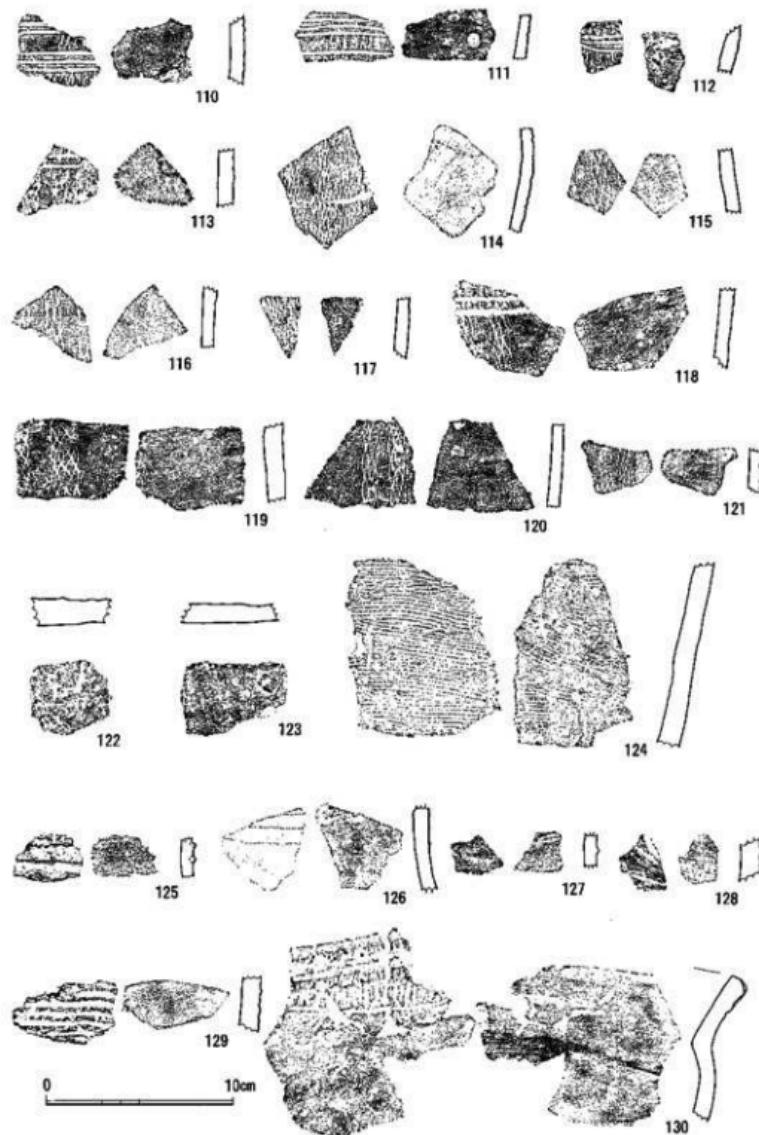
第18図 繩文土器実測図(IV)

- 18 -

82~102 C区

103~104 1号土塁

105~109 D区



第19図 縄文土器実測図（V）

110~130 D区

第IV章 小丸遺跡の調査

第1節 調査の概要

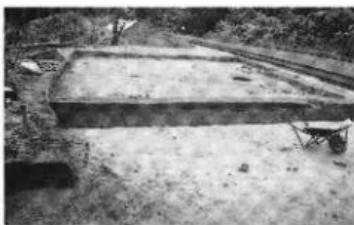
小丸遺跡は上山ノ丸遺跡、北ノ追遺跡よりもさらに鈴鹿街道を清武町よりに進んだ所に位置する。遺跡所在地は宮崎県宮崎郡清武町大字加納字小丸丙1171-5である。調査前の状況は道路に面した土手や狭い空き地であったが、調査を行ったところすでに土取りやゴミ穴などの攪乱で遺跡のはほとんどは破壊されていた。遺跡の最下層面の暗褐色硬質土に縄文時代の散石遺構（写真）が遺存しているだけであった。散石遺構に伴う遺物は散石中から条痕文土器片5点、無文土器片4点が出土している。ほかに攪乱中から陶磁器片69点が出土した。

第V章 おわりに

上山ノ丸遺跡、北ノ追遺跡、小丸遺跡の3遺跡は清武川左岸の台地上に所在する遺跡である。上山ノ丸遺跡B地区を除き、いずれの遺跡も縄文時代早期の文化層を持つ。このことは縄文時代早期においてこの台地が生活に適した土地であったことを裏付けるものであろう。現在中野における旧鈴鹿街道の正確な位置は不明なので、古地図や閉鎖登記簿、字図によつての位置の確認が今後の課題として残されたことは非常に残念である。



小丸遺跡散石検出状況



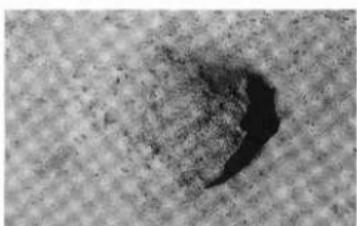
A地区 全景



B地区 全景



A地区検出 築石遺構



A地区検出 築石遺構掘込



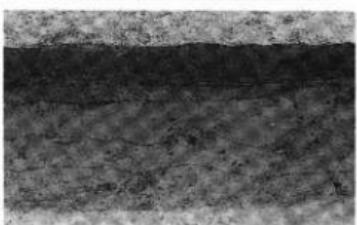
A地区検出 道路状遺構



B地区検出 道路状遺構地山掘削状況



A地区 板碑積査状況



上山ノ丸遺跡基本層序（A地区中央壁）

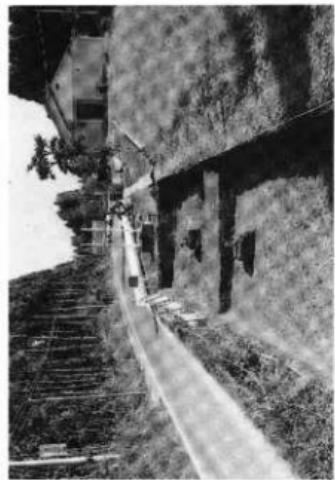
上山丸遺跡写真版



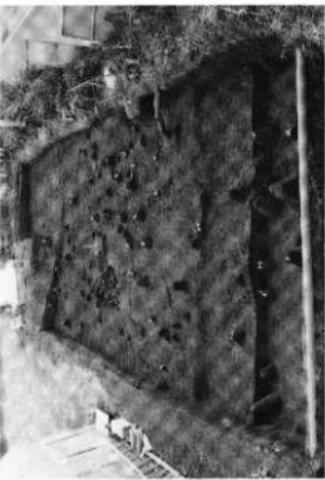
北ノ追道路A地区全景（西から）



北ノ追道路C地区全景（南から）



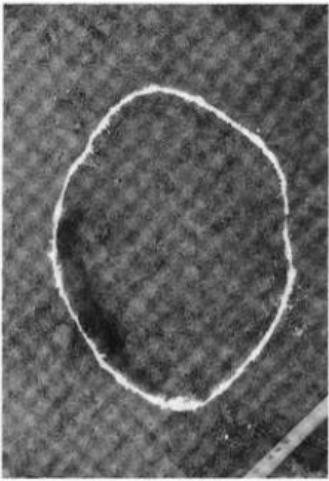
北ノ追道路A地区全景（南西から）



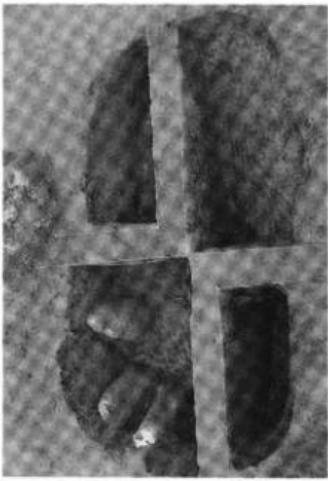
北ノ追道路D地区全景（北から）



北ノ追遺跡C地区1号土壤



北ノ追遺跡D地区1号集石遺跡



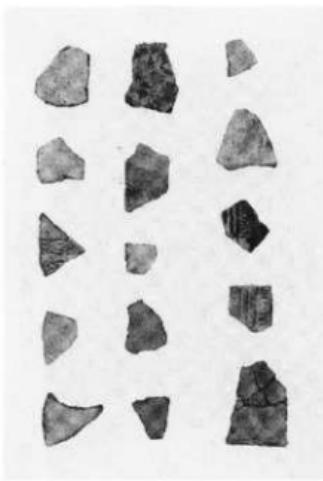
北ノ追遺跡C地区1号土壤



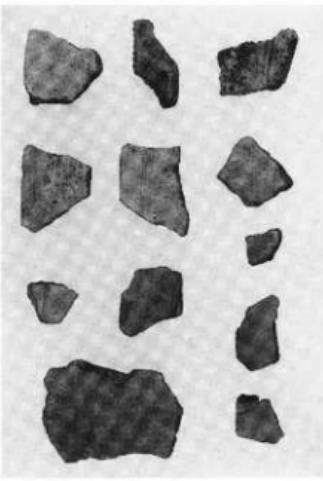
北ノ追遺跡D地区1号集石遺跡



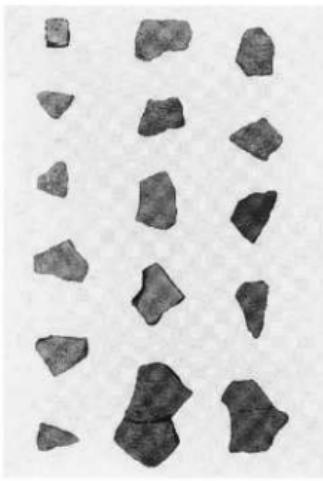
北ノ追遺跡出土繩文土器Ⅰ類



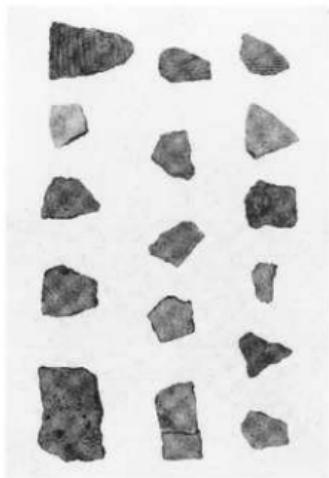
北ノ追遺跡出土繩文土器Ⅱ類



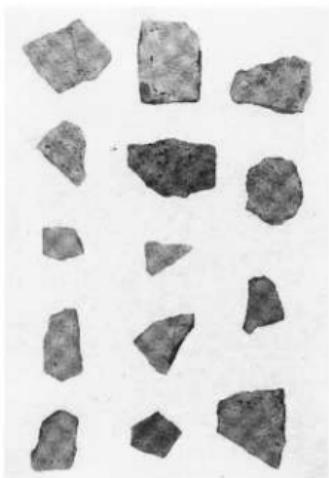
北ノ追遺跡出土繩文土器Ⅰ・Ⅱ類



北ノ追遺跡出土繩文土器Ⅱ類



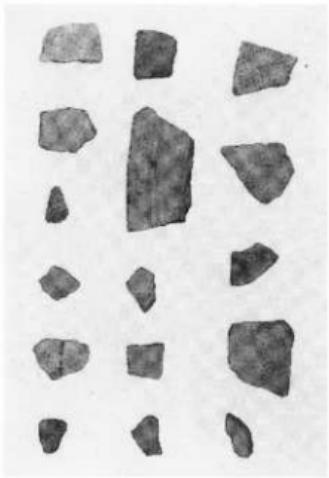
北ノ追跡出土縄文土器 V・VI類



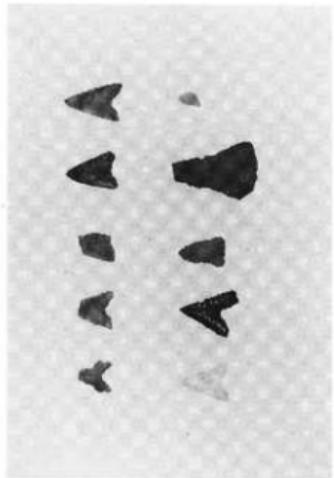
北ノ追跡出土縄文土器 II類



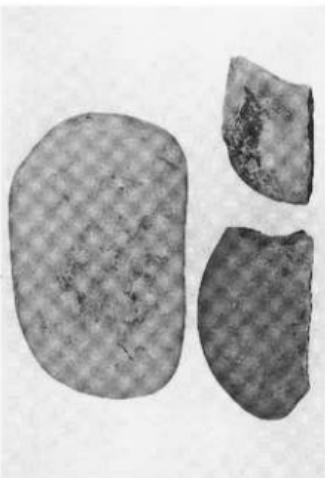
北ノ追跡出土縄文土器 II類



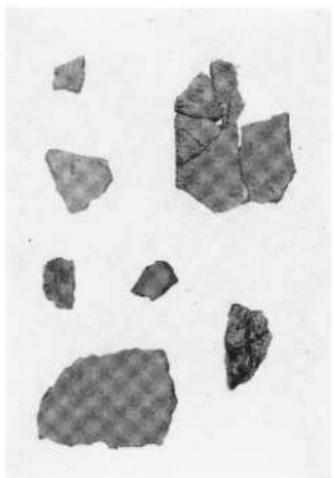
北ノ追跡出土縄文土器 V類



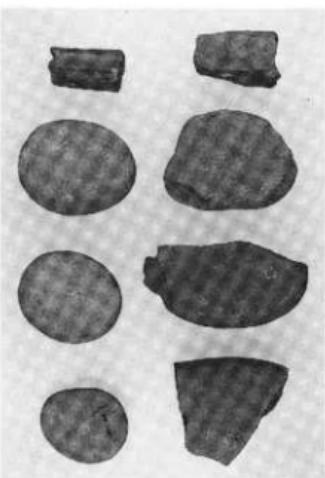
北ノ追遺跡出土打製石核



北ノ追遺跡出土石皿



北ノ追遺跡出土編文土器 V・VI・VII類



北ノ追遺跡出土磨石

上山ノ丸遺跡
北ノ迫遺跡
小丸遺跡

県道宮崎～北郷線地方道特別改良
1種工事に伴う発掘調査報告書

1993.3

編集行 宮崎県教育委員会
〒880 宮崎市橋通東1丁目9-10

印刷 (株)富士写真印刷
〒880-02 宮崎郡佐土原町大字下那珂
字浮橋7418-2
